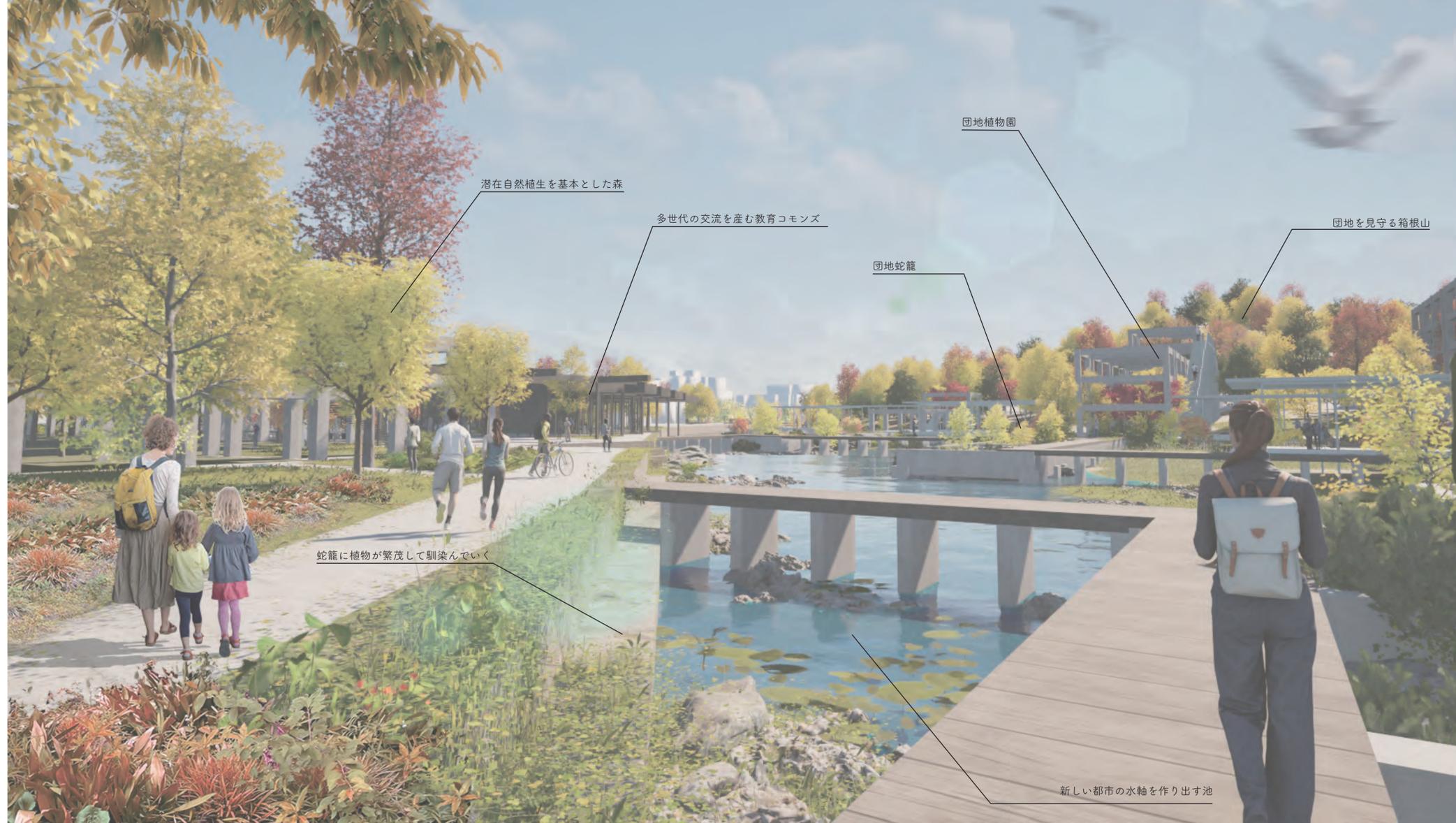


風景蘇生術

～戸山公園および戸山ハイツの教育コモンズとしての再編～

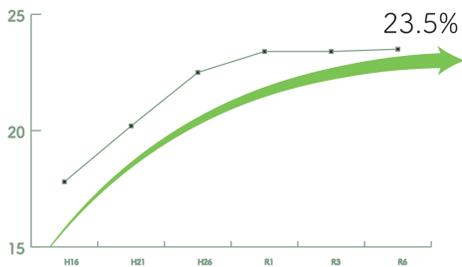
大都市東京には、多くの大規模緑地が残されている。一方で、計画緑地帯の一部になるはずだったが、戦争、都市化によってその運命を絶たれてきた場所もある。その一つが、対象地である「戸山」である。そこで、「戸山」の歴史と現在の団地の暮らしの記憶を残しながら、都市に隠された戸山の大規模緑地を、都市を支える場所として再編し、大都市の緑地帯の形成の第一歩となるような**蘇生術**を施していく。



背景・目的

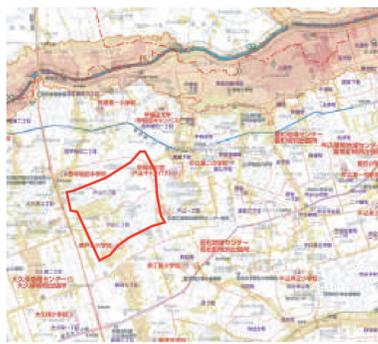
現在の大都市には様々な社会問題が山積している状態である。高齢化、人口減少、気候変動による災害、都市インフラの老朽化が深刻化し、都市が変わらなければ行けない「**転換期**」である。また、再開発事業などにおいてオープンスペースのあり方は、より一層重要性を増している。

東京都の高齢化率



東京都の高齢化率は、上昇を続けており、令和6年には、過去最高の23.5%となっている。

新宿区ハザードマップ



東京という大都市には、守られてきた大規模緑地がある。しかし保存状態が良い場所だけではない。都市化によって元々持っていた緑地としてのポテンシャルを活かすことができず、**街から隠され、取り残されてしまった場所がある**。大都市において不遇な扱いをされてきた緑地に着目し、**風景を生き返らせ、大都市において都市の骨格としての緑地の実現のための空間提案を行うこと**が今回の提案の目的である。

対象敷地

対象地：都立戸山公園、戸山ハイツ、戸山3丁目の住宅街

市街地と公園・緑地が混ざり合う場

対象とする敷地は、東京都新宿区のほぼ中央に位置する**都立戸山公園、都営戸山ハイツ、戸山3丁目の住宅街を含む敷地**である。対象地は、住宅地と都営団地の隙間に都立公園である戸山公園が整備されている場所であり、市街地と公園緑地が混ざり合っている場所として見ることができる。都営団地と都市公園は境界が曖昧になっているような場所もある。

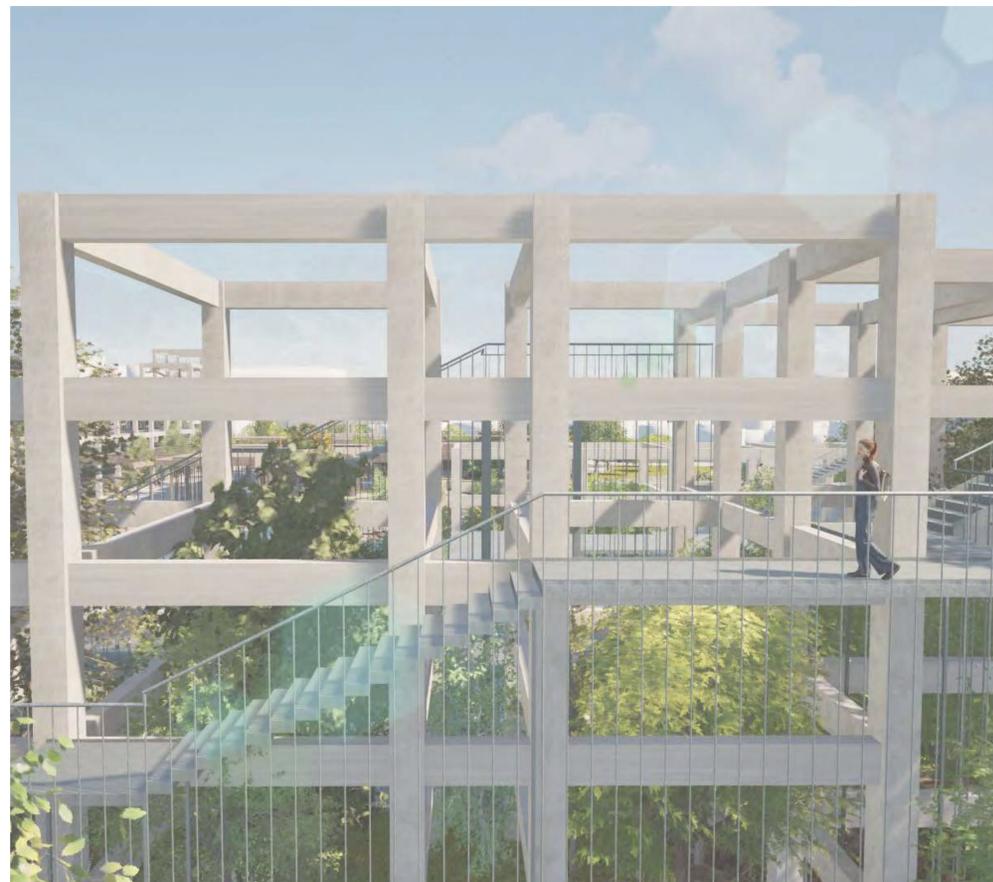
多様な属性が混ざり合う都市



市街地と公園・緑地が混ざり合っている。

対象地の広域的な位置付け

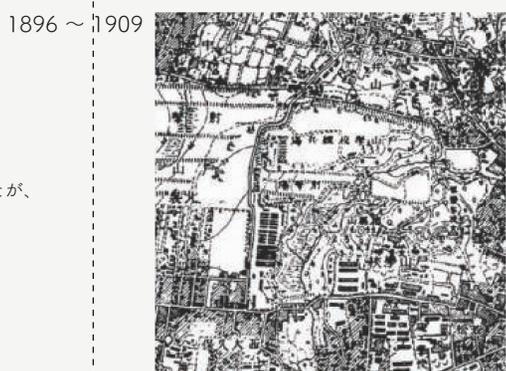
この敷地は、早稲田大学、学習院女子大学などの教育施設が周辺にあり、学生の街となっている。さらに高田馬場、新大久保、新宿という商業地域にも近いため、学生などの若者が多く利用できる立地的ポテンシャルを持っている。





失われた大規模緑地

対象敷地は、その立地から1939年の東京緑地計画以降の東京の大緑地帯を形成することにおいて重要な部分として位置付けられてきた。新宿御苑と神田川の水と緑をつなぐ部分となっていた。しかし、その計画は、当時の東京の財政上の課題や第二次世界大戦後のGHQの指令によってなくなり、敷地の緑地としてのポテンシャルを活かすことができなくなってしまった。



帝都復興計画
復興計画の策定の過程で、公園として提起されたが、大幅に削減された。



陸軍戸山学校
1873(明治6)年、尾張藩徳川家の下屋敷跡に「陸軍兵学寮戸山出張所」が設置され、翌年「陸軍戸山学校」と改称。ここでは射撃などの訓練が行われた。1945(昭和20)年、「太平洋戦争」の終戦により閉校となった。



木造住宅団地 戸山ハイイツ
全国で初めて整備された木造住宅団地。GHQの司令によって陸軍用地の敷地の中に作られた。敷地全体を覆い尽くすように住宅団地が並んでいる。



WIRED. "緑化都市" になり損ねた街——「東京の都市計画」135年の系譜から見えてくることが
https://wired.jp/article/vol54-tokyo-as-it-could-have-been/ (2024.10.03)

水が集まり、流れていた場所

巨大な池を持つ大庭園

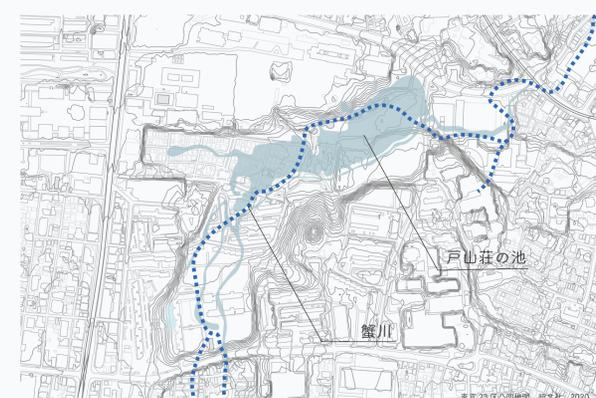


かつてこの敷地は、**水とともに**にあった。江戸時代には、尾張徳川家の下屋敷庭園である「戸山荘」に大きな池が作られていた。また、昭和までは、歌舞伎町が水源であったり、崖線の湧水が水源と言われるなど、多くの水源の説がある「蟹川」が流れていた。この蟹川は、大久保を形作ったと言われる場所である。しかし、現在は、蟹川が暗渠化され、下水道として名残を残しているのみである。また、池は、地形としてその名残を残している。「戸山荘」の池を作るために出た土で盛られた箱根山が池があった証拠である。

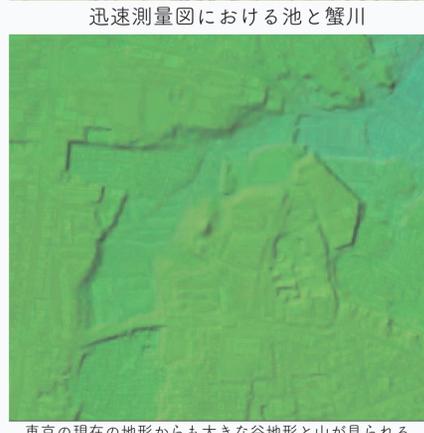
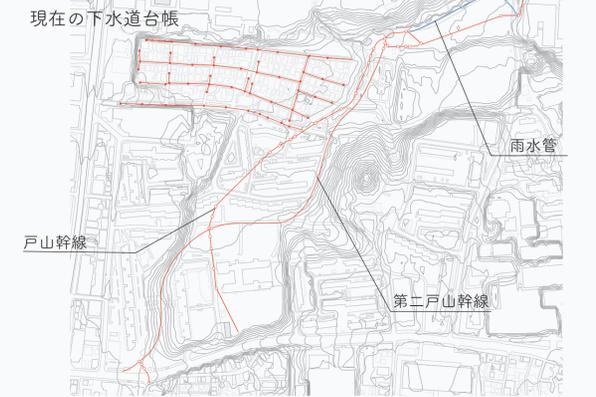
尾張徳川家下屋敷庭園戸山荘

かつて戸山荘には、大きな池が作られており、池作りの際に出た土を積むことで、現在山手線内最高峰となっている箱根山が作られたと言われている。

窪地を作り出した蟹川



名残を残す蟹川と御泉水



蟹川と戸山荘の池は、現在は、全く残っていないが、確かにこの場所にあった名残は残っている。蟹川は、暗渠化され、戸山幹線として合流式下水道となっている。戸山荘の池は、大きな谷と箱根山に名残が残っている。

周辺都市から切り離された場所

拡大しようとする緑地



都市公園区域として都市計画決定された住宅地



戦後、陸軍用地から住宅街として整備されたこの場所は、周辺住宅地とは、異なる雰囲気である。道路の幅員も大きく、地形によって明治通りから隠れ、静かな住宅街となっている。

街に対して背を向ける団地



都市から取り残されてしまった場所

「都心の限界集落」団地と呼ばれる戸山ハイイツ
総戸数3019戸で、入居率は約9割。団地のはほぼ全体が含まれる新宿区戸山2丁目の人口は4月1日時点で5363人。65歳以上の割合を示す高齢化率は56.4%。孤独死も見られるため、コミュニティの強化も必要になっている。



戦後に木造住宅団地として整備され、建て替えによって都市公園である戸山公園と現在の戸山ハイイツが整備された。しかし、周辺エリアと背を向けた形に整備され、谷地形によって、都市公園は、都市から隠されてしまった。

豊かな自然環境が残るもの、そこには、人の賑わいは感じられず、周辺都市とは異なる雰囲気が漂っている。

都立戸山高校

学習院女子大学

マスタープラン (1/1000)

住宅街にできる「小さな森」

多くの人々が集まる芝生広場

水辺を見通す視点場

様々な生物が集まる水辺

多世代協働の教育コモンズで属性によらない交流が広がる

箱根山と水辺を一望できる展望台

箱根山

徐々に植物によって躯体が覆われていく

東戸山小学校

団地跡を形どった低木のガーデン

団地の人々が集まる芝生斜面

大久保通り



0 50 100 200 300 (m)

A A-A' 断面 (1/1000)

B B-B' 断面 (1/1000)



団地が躯体のみになることで、地形と連続しているように見える。

団地の周りを囲うように立体回廊が作られ、樹冠の上から樹木を見ることができる。

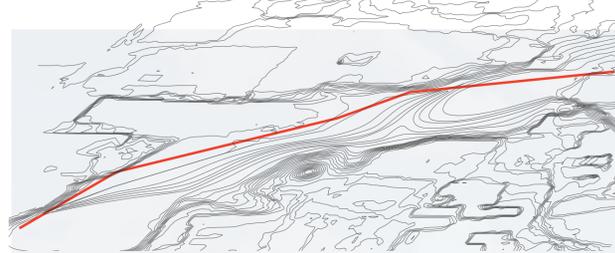
Concept 都市に見捨てられた場所を生き返らせ、都市を支える場所へ

生き返りのための3つの蘇生術

3つの手法によってこの場所の風景が「蘇生される」だけでなく、都市空間に対して新しい風景に転換するための起点となっていく。

100年残る歴史軸

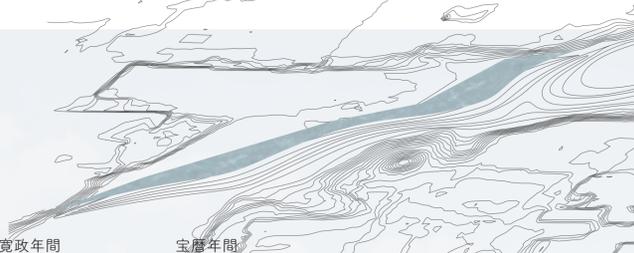
新しい都市軸を作る。次の100年後まで残るような軸線としていく。



対象敷地には、この軸線が通り、戸山荘の時代も池としてこのつながりが、作られ、対象地の重要な軸となっていた。一方で現在は、その名残を残しつつも、ほぼ消えてしまい、南北の強いつながりはなくなり、公園も団地によって南北に分かれているように感じられてしまっている。

失われた水辺の再生

次の100年の都市のための新しい水軸



寛政年間

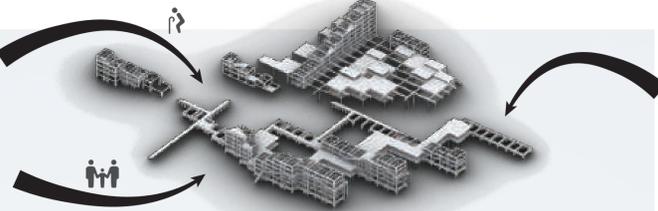
宝暦年間



対象敷地は、池、蟹川という水が、かつては重要な要素であった。そこで、軸線に沿うように大きな池を作り、水のある場所として再生し、今後100年の都市空間における緑地としていく

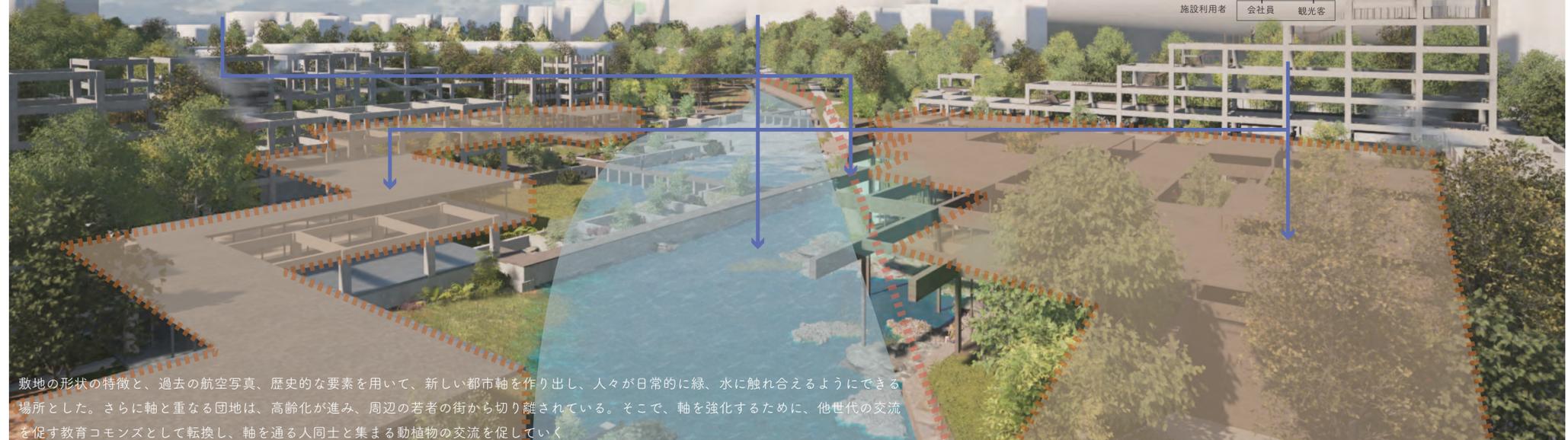
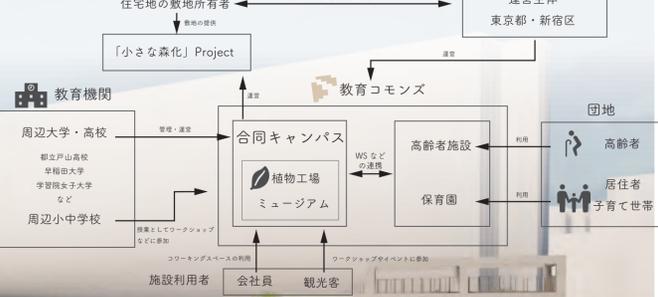
軸を強化する交流拠点

団地を都市から切り離すのではなく、再び都市を支える場所としていく



都市から取り残された団地の軸と重なる部分を解体、減築し、機能転換させていく。団地の高齢者と周辺大学、高校などの若者のための教育コモンズとして再編し、真ん中を通る2つの軸によって流れる人を集めていく。

属性をつなぐスキーム



敷地の形状の特徴と、過去の航空写真、歴史的な要素を用いて、新しい都市軸を作り出し、人々が日常的に緑、水に触れ合えるようにできる場所とした。さらに軸と重なる団地は、高齢化が進み、周辺の若者の街から切り離されている。そこで、軸を強化するために、他世代の交流を促す教育コモンズとして転換し、軸を通る人同士と集まる動植物の交流を促していく

3つの手法が異なるスケールの空間を生まれ変わらせる。

都市

周辺市街地から緑地が隠れ、都市の裏側となってしまった大規模緑地

「軸」を作ることによって水のつながりなどを復活させ、都市の骨格としていく。街から閉じてしまった大規模な緑地において南北の大きな抜けを作り、視線を通していく。

新たな都市の骨格となる3つの軸

- 人の軸
- 水の軸
- 緑の軸

都市の人々の生活の軸として蘇生していく

周辺

歴史の中で、この対象地は、緑地としての機能を失うだけでなく、現代都市から切り離され、取り残された場所になってしまっている。

その場所において、かつて求められた緑地としての機能、つまり都市における水と緑のつながりを再生、さらに、取り残された団地において高齢者支援を中心としたキャンパスなどを複合した教育コモンズを作ること、若者との交流を作る。今後の都市空間の空間的課題、社会的課題に対するアプローチの第一歩のような場所になる。

ヒューマンスケール

公園を分断するように位置する団地。大都市の裏という感覚を与える空間 単調な空間となった都市公園と団地

都市における植物、水との関係を変える。樹冠の上から森を見る視点の獲得を行うために、人の居場所であった団地を躯体のみにして、植物の場所として、植物園や蛇籠としていく。

様々なスケールに広がっていく緑地の1歩目となる 都市空間に対する長期的な変化

緑 (Public) が広がっていく

現在
Publicな緑が adapter となる教育コモンズを起点として徐々に広がり、周辺の住宅街を巻き込んでいく。全体が緑地として機能し、さらに周辺の街に広がっていくことができる。

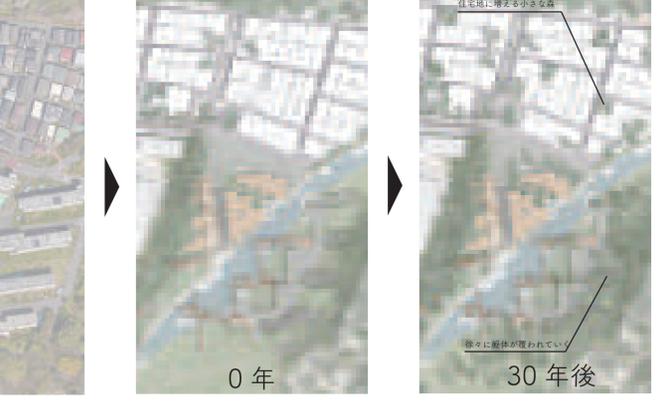
未来

広域のつながりの広がり

水のつながり
緑のつながり
人のつながり

周辺の都市空間の様々な属性を取り込み、水、緑、人のつながりを強化し、波及させていくことができる。

長期的な変化



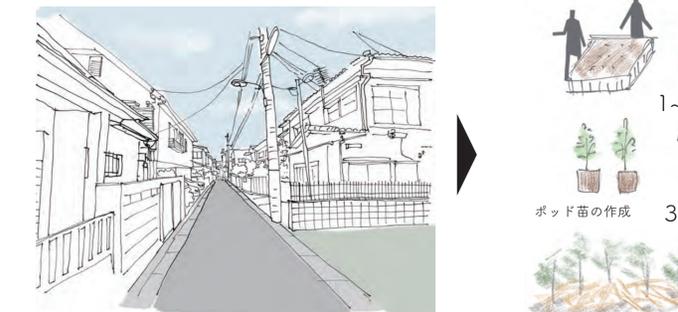
将来の都市の水と緑のつながりによって出来上がる動植物の広がり



都市に生息する鳥や虫の通り道となる。

- カモ
- トンボ
- カメ
- キジバト
- ヒヨドリ
- モズ
- コゲラ
- スズメ
- カワセミ
- ハクセキレイ
- ムクドリ

緑を広げる「小さな森化」Project



徐々に森になる住宅街



ポッド苗の作成

詳細平面図 (1/500)

人の居場所から動植物の居場所へと転換する。

詳細設計 都営戸山ハイツ

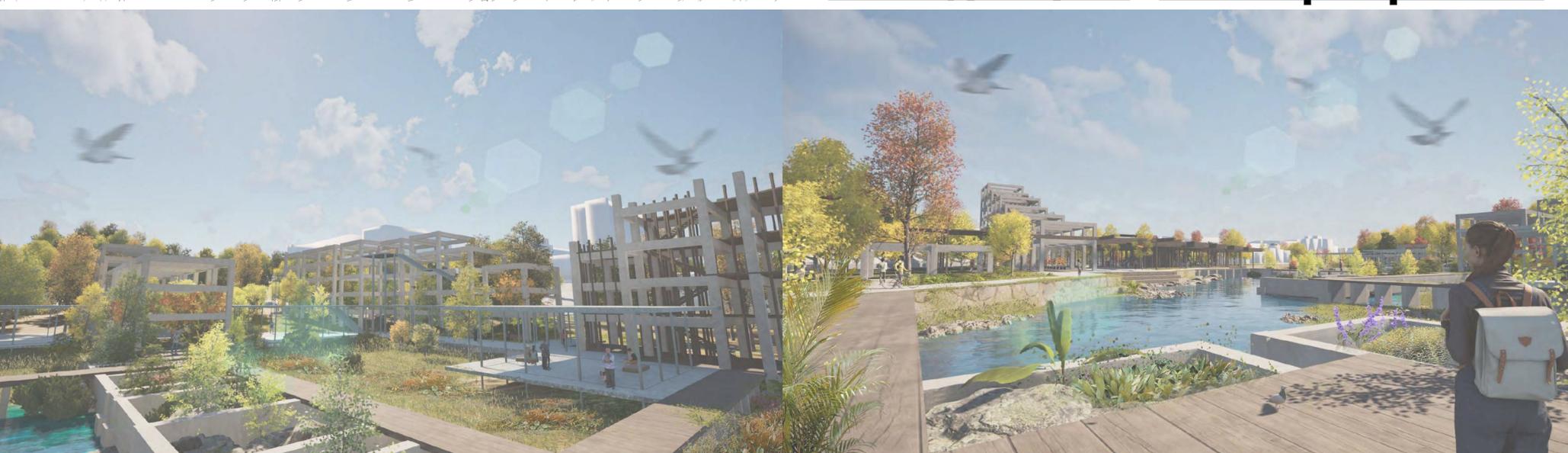
新しい拠点となる建築を作り、多世代の交流拠点となる教育コモンズとする。団地は、人の居場所から動植物の居場所として解体、滅絶を行なっていく。この場所で、人々は、徐々に覆われていく団地躯体を見ながら、交流を広げる。人同士だけではなく、動植物との交流も行い、今までの都市空間にはない、新しい緑地となっていく。

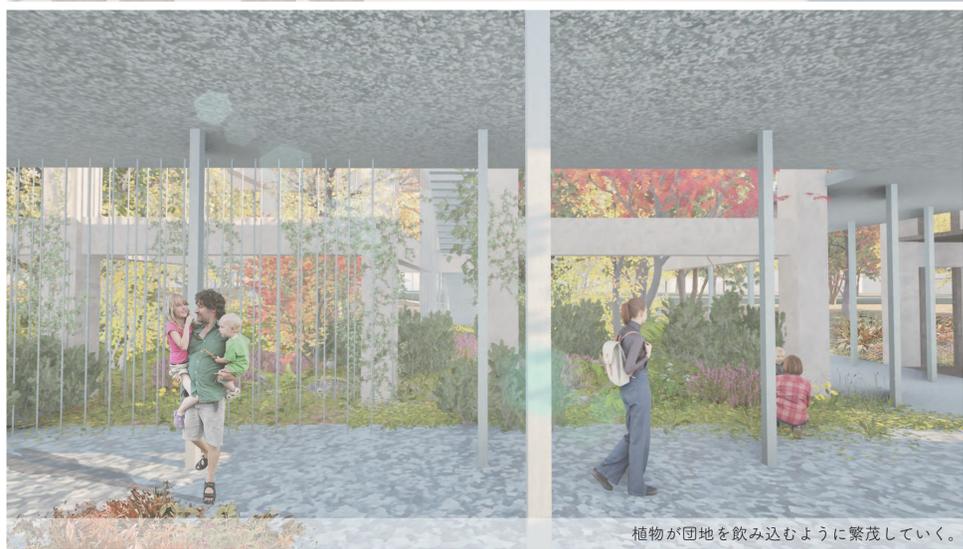
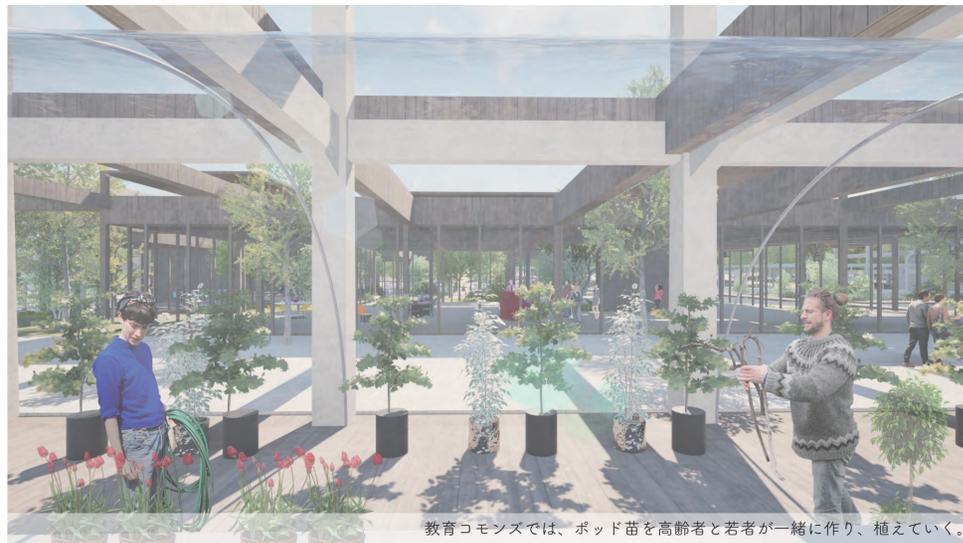


施設の配置計画について

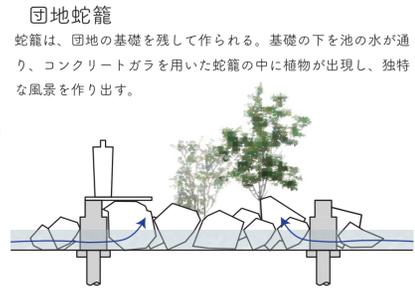
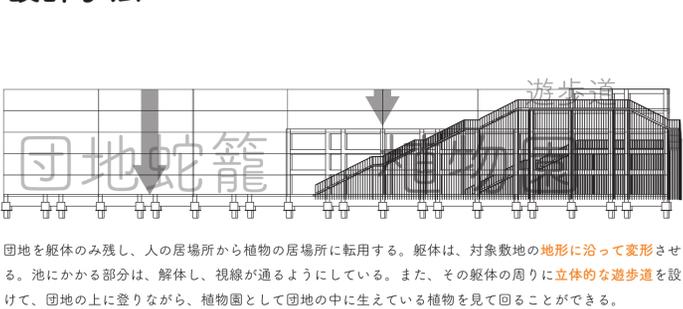
池を回るように回遊路と回廊を設けている。水を森を行き来することができ、その中で交流が生まれるように滞留のできる場を作っている。回遊路、動線は、団地の配置計画や現況の動線を生かして作られる。交流施設、高齢者施設は、現在の団地の特徴からこの位置に設置されている。現在の中高層棟の、一階部分には、商店が並んでいる。その現状からこの部分が人が集まる場所であったと考え、施設を設置した。

ゾーニング

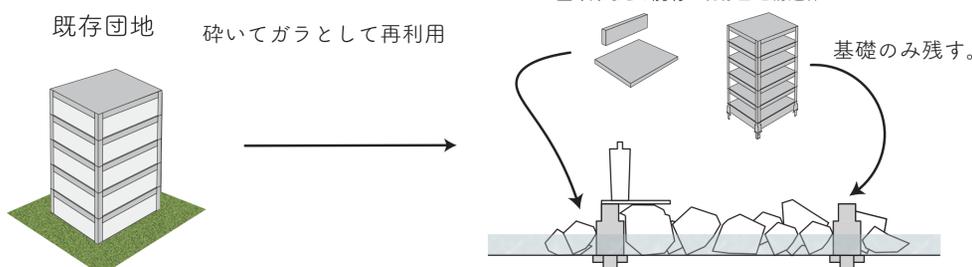




設計手法 生活を支える基盤から今後の都市を支える基盤へ転換する。



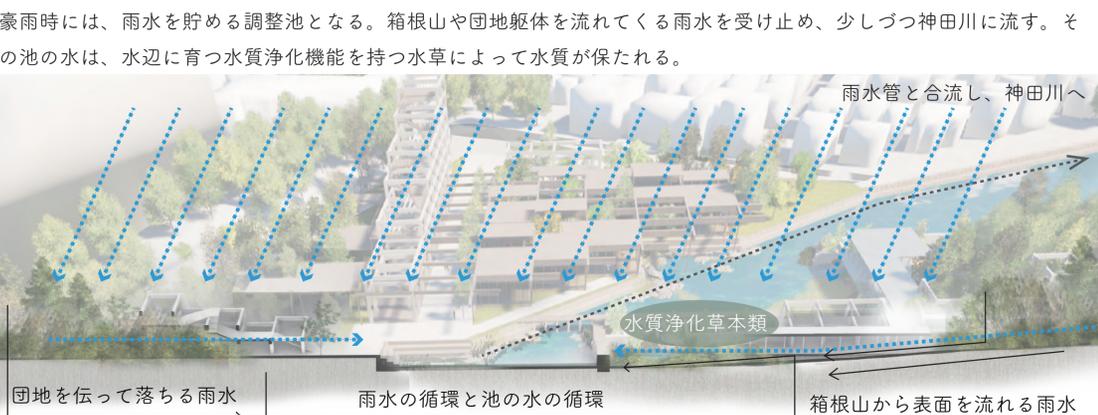
減築、解体で出た団地のコンクリートの再利用



動線計画

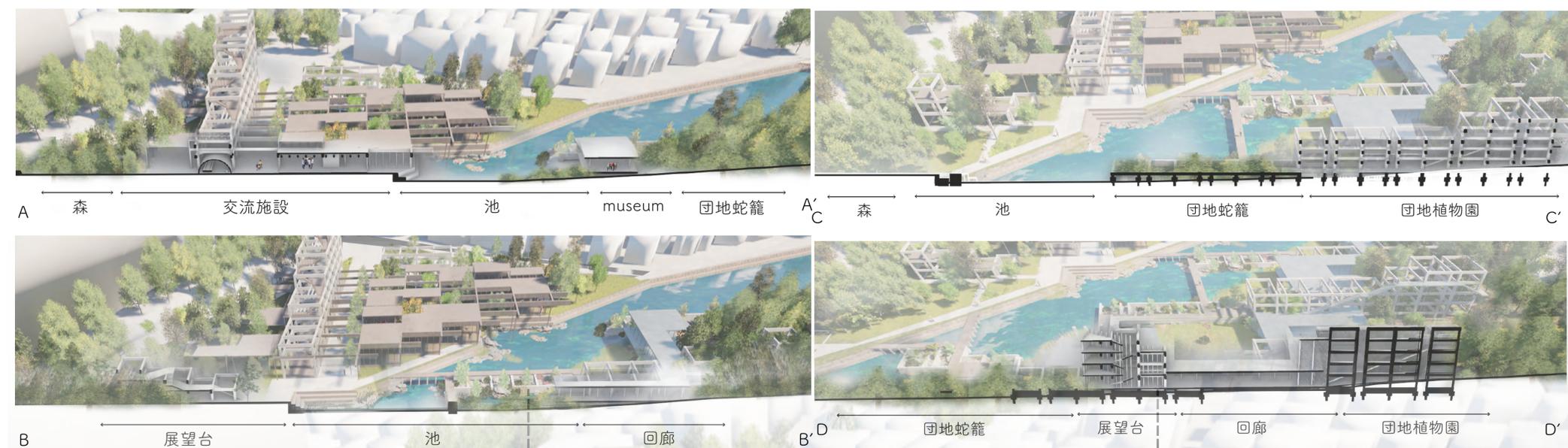


水循環



多様なシーケンスを作り出す断面構成

施設、池、蛇籠、回廊、植物園、山という多様なシーケンスを作り出すデザインがされている。ここをおとづれる人々は、移り変わる風景を楽しみながら、施設や回廊において、交流が行われる。



多様な動植物の居場所になる

訪れた人々は、回廊や団地躯体の中から様々な動植物を見ることが出来る。さらに、都市の野鳥、虫の通り道になっていく。



